

週刊 武四郎

第 36 号

2018 年(平成 30 年)12 月 12 日(水)
発行・松阪市

●毎月第二週は、
松浦武四郎と北海道に
ついてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

秘めおくべし

松浦武四郎という人は、蝦夷地探査の中で実に九千八百ものアイヌの地名を調べて後世に残してくれたことから、現存する北海道各地のアイヌ語地名の名付け親でもあり、そうした意味も含めて「北海道全道の名付け親」ということができるのではないかと思います。

この九千八百という数の膨大さにも驚きますが、また武四郎さんは、アイヌの人々の現状や、生活風習などを細々と書き残しました。でも第三十二号で取り上げた『近世蝦夷人物誌』などは、幕府からの許可が下りず出版することはできませんでした。アイヌの人々を酷使する現状を暴いて松前藩を刺激することを幕府はよしとなかったのです。武四郎さんは、こうした幕府の態度に絶望したのか、その後



の探査をまとめた『丁巳日誌』『戊午日誌』などを「不貸不鬻」として、紙に包み封印しました。こうした文書が残っていることを時の権力者に知られて抹殺されることを畏れたのでしょうか。

この時、武四郎さんが抱いていたのは、「アイヌ民族は、いつかこの世からいなくなってしまうかもしれない」という危惧であったと思われます。武四郎さんが当時目の当たりにしていたのは、働き盛りの男は遠いところ

の労働に駆り出され、女たちは和人の妾にされ、村に残った老人と幼子は飢えと寒さに次々と斃れてゆくという現状でした。

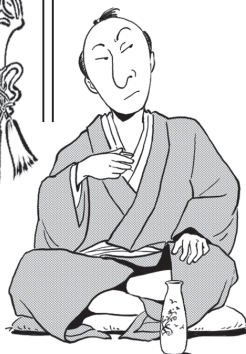
武四郎さんは、その現実の前に為す術もありませんでした。己の無力さを実感した時、残っていたのは見聞したことを書き残すということだけだったのでしょう。アイヌの人々は文字を持たない民族です。すべては口伝による伝承でした。ということは、民族が絶えた時、

その口承もすべて消えてしまうことになります。

武四郎さんは、文字によって「後世に残す」ことだけに専心しました。「不貸不鬻」という文言からは決意のようなものが感じられます。実際、ご子孫によって固くその遺言は守られ、紐解かれた武四郎さんの記録を私たちが出版物として読むことができるようになったのは、その後から九十年を経た昭和五十年代になってからのことでした。

松浦武四郎 (1818 ~ 1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

